

トピックス

1. 播州日誌「東京五輪の中止を！」
2. 社労士への道 「妻への感謝」



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 42

2021年6月号

ぼうしゅ 芒種～夏至の頃 あじさいのおまじない

史上、最も早い梅雨入り宣言が6月17日に発表された。長雨は生命に恵みをもたらし、草木は一層色濃く鮮やかに盛り上がります。雨で沈みがちな気持ちには紫陽花やクチナシの花が寄り添ってくれます。紫陽花の花も近頃は新種のものも多く、5月初旬から花屋の店先を飾ります。個人的には伝統的な青紫色、薄紅色のものが好きです。初夏、大きく球状に集まった花を開く。私たちが花と呼んでいるのはどうやらガク(花の中で一番外部にあり、花びらを支えている)の部分であるらしい。土壌のペーハーや花びらの色素が少しずつ分解して花の色を変化させる。その故をもって花言葉は「移り気」。

相変わらずのコロナ禍。長雨よりも大きなうんざりが蔓延している。小耳にはさんだ、あじさいのおまじない。6月の6のつく日、6日16日26日にあじさいの花を一輪軒下に逆さに吊ると、厄除けや魔除けになるらしい。又、トイレに吊ると婦人病にかからないとか…。あじさいは有毒植物。毒をもって毒を制す。古の人々はこの毒が病をはねのけると考えたのでしょうか。一向にラチのあかないコロナ感染拡大。この際、騙されたつもりで軒先に吊るしてみましようか、「一輪の紫陽花を…。」

※芒種 6月5日頃

※夏至 6月22日頃

随筆 『龍馬と私』 ～ 海援隊(2) ～

海援隊の歴史的意義を考える。幕末の頃には日本国という意識をもっていた人はわずかであったと思われる。多くの人たちは自分が生まれた場所を一生離れることがなく、せいぜい藩の範囲で行き来していたにすぎない。きわめて狭い社会の中でその一生を終えた。

脱藩浪士たちがこじあけるようにして藩という枠を越えていったのは、封建時代、鎖国時代の閉塞感や時代の中に深く重く沈殿していた身分制度による抑圧が内圧として吹き出していったようなものであった。海援隊の隊士の多くは脱藩浪人。隊への応募資格者として各藩の脱藩者、いずれも海外(世界)の志ある者と極めて明確に身分制度を排除している。脱藩者を公然と認めることで脱藩行為を肯定し、封建社会のルール否



海援隊 いろは丸(模型)

定している。つまり藩とは一線を画している。画していながら必要に応じて藩の援助を受け得る仕組みにしている。

海援隊には龍馬の思想が色濃く反映しているといわれる。隊の規則にしても秀^すれて民主的なものであり、封建制度とは真逆の考え方が出ている。全国各藩にあまねく存在した身分制度は、日本の経済社会の発展の大きな負の部分であり、江戸幕府 300 年の年月は日本の文明を大きく遅らせたといわれている。海援隊には討幕論者のみならず、佐幕論者も含まれていた。「一人くらの異論家を同化できないでどうするか」と龍馬は反対する者を一喝している。まさに龍馬は土佐の身分制度の中であえぎ苦しみ唇をかんだ。多くの差別を経験した自らの怨念を海援隊の組織作りの中で打ち破った。そして自らの理想とする、民主平等の実現を形として作りあげた、最初の日本人となったのである。つまり海援隊は藩や身分制度を越え、近代社会の理念を先取りした集団であり、海外を志す者の集まりでもあった。目的の中に「射利」を入れている。金儲けを認めるという発想は士農工商と言われていた当時かなり新鮮で驚きであったと思われる。龍馬はその点でも経済的視座から金を儲けることは良いことと言い切っている。龍馬の面目躍如というところである。海援隊の歴史はわずか 1 年ほどでその幕を閉じるが、まさに維新回天、文明開化の扉をあける、象徴的な出来事として幕末史の中でさん然と輝いている。

播州日誌



「東京五輪の中止を！！！」

コロナ禍が続いている。この原稿を書いている 5 月 26 日現在、世界で 1 億 7 千万人近くの人が感染し、340 万人以上の人が死亡している。開催国日本でも毎日 4000 名近くの新規感染者が発生しており、累計で感染者 72 万人、死者 1 万 2 千人余りである。変異株、なかでもインド株が世界中で猛威を奮っており、感染拡大が続いている。

肝心のワクチン接種も各国の事情は様々であるが、大きく見れば順調にできているわけではない。日本の問題は、ワクチン接種がスムーズに進んでいないことと、重傷者をカバーできない程、医療崩壊している事実である。中等症あるいは重症にもかかわらず自宅待機を余儀なくされ、自宅での死亡が増加している現実である。IOC も JOC も開催を前提に動いている。なぜだろう。国民世論の 60%以上が中止・延期を望んでいる。一国の総理が安全で安心な大会を目指す。反対している人の気持ちがわからないという。なんという傲慢さだろう。平和の祭典オリンピックの相対的意義は薄れている。各競技団体の多くはそれぞれに世界大会、世界選手権を実施しておりオリンピックでまとめて世界一を競う必要性も半減している。かつてオリンピックは国威発場の場といわれた。偏狭なナショナリズムはかえって世界各国の争いを招く。それに巨費を投じての開催も疑問視されている。誘致に使った国税の使途もあいまいなままだ。徹底した商業主義に毒さ

れており、貧富の格差の拡大や先進国と発展途上国の不平等も解消されていない。世界中で感染拡大が続いており、多くの人々が毎日のように死んでいる事実を認識すべきだ。利権渦巻く商業主義のオリンピックなど要らない。利権のための開催ならとんでもない過ちだ。日本人はもっと意見を発表すべきだ。一日も早く開催中止を決定し、いわゆる「損切り」をしないと傷口を大きくする。IOC も JOC もそして日本の政治家たちも国民も今こそ「中止する勇氣」を持たねばならない。ハラハラドキドキのオリンピックなど真っ平だ。



「外国人労働者の涙」

コロナ禍が続く中、日本に滞在する外国人労働者にも影響が出ている。母国への出入国がままならぬからである。低迷する日本経済ではあるが、コロナ後を考えてとき、外国人労働者の役割は益々必要不可欠なものになるだろう。慢性的な人手不足は深刻さを増し、仕事はあっても人手が足りないという話をよく聞く。2019年のデータによれば、外国人労働者の総数は300万人。その中、技能実習生は全体の14%で42万人。国籍別ではベトナムが最多で53%、あと中国フィリピンと続く。

入管法の改正が見送りとなったがその背景にはスリランカの女性が入管の収容所で死亡した事件があるといわれている。外国人労働者にとって入管(出入国在留管理庁)は恐ろしい官庁であって決して救いの手を差し伸べてくれる存在ではない。法の適用一辺倒で人権尊重の意識は薄い。島国である日本。歴史的(伝統的)な排他主義もあって難民申請が認められる件数が極めて少ない。技能実習生が入管でつかまるのは在留期間切れ(オーバーステイ)や許可外労働が多いといわれる。

なぜ逃げることになるのか。まずほとんどの人が80万円から180万円の借金をして日本を目指す。運よくコンプライアンスの会社(実習実施機関)に入ればよいがそうではなく、賃金の不払いやパワハラ、セクハラといった悪い業者のところに入るととんでもないことになる。最賃で勤務した場合、1日8時間、週5日、月に22日労働した場合の賃金、158,400円。法定福利や家賃等を控除して手取り10万円前後では借金を支払い、母国に仕送りすることができるのだろうか。

実習生制度の根本的な誤り「技術移動」へのこだわり、コンプライアンスでない管理団体(受入れ機関)、劣悪な職場環境、3K4Kの職場、パワハラ、セクハラ。彼らには「職業選択」と「移動」の自由がない。送り出し機関にも問題がある。ベトナムの場合、法律が守られることは少ない。汚職が蔓延している。ワイロが普通のお国柄。禁止されている保証制度も、はっきりと残っている。半分は騙されて国を出る。夢に胸を膨らませて。母国を離れ親とも子とも別れ別れの生活。わずかな給料にもかかわらず、法定福利の名のもとに健康保険、厚生年金、雇用保険に強制加入させられる。厚生年金の一時金の還付を受ける制度の実態に関するデータもない。事業主負担分は元々、還付する気などない。実習生の束縛から離れるために「逃げる」。待っているのは闇の世界。追い詰められて違法ということを知りつつ生きるために働く。例えば強制退却させれば母国で激しい迫害にあい、場合によっては殺されるというケースでも人道的な配慮を期待することは難しいといわれる。スリランカ女性の遺族が入管を訪問した際の冷たい対応。「私たちは動物ではない。」「狭く汚い収容所」との訴えは私たちの胸に突き刺さる。経済大国であり、先進国であるはずの日本と日本人が外国人労働者に対して今のように冷酷であっていいのだろうか。入管に捕まれば強制送還が待っている。志半ばにして無念の帰国。厳しい社会の目にさらされ、借金に苦しむ生活が待っている。実習生、研修生制度を維持するのならたてまえである「技術移動」の理想を捨てて単純労働を認める必要がある。現実が「出稼ぎ」であることはみんなが知っている。歴史的に見れば沖縄や九州、東北から東京や大阪への出稼ぎが昭和の時代には存在した。せめて元気な体でそれなりの成果(お金)をもって母国に帰らせてあげなければならない。喜びと悲しみに寄り添わねばならない。日本国として日本人として。そうしなければ既に進行しつつある日本の移民社会化の流れに乗ることができず、亡国への坂道を転げ落ちることになる。今の日本にとって大事なことは外国人労働者との共生である。外国人労働者に涙を流させてはいけない。



「社労士への道」

第10回 「妻への感謝」

「生きよ！！」という声。私の心の中の奥深いところにある私の魂(コア)のようなもの、得体は知れない。先祖や父、母、妻や孫たち、友人への思い。私の過去に起こったすべての出来事。あるいは私そのもの「真我」が発した言葉であった。つまり私は死にたくはなかった。むしろ生きたかった。それはとりも直さず生きたいという生への執着であり、死という絶対「無」の世界への恐怖であったかもしれない。死ぬこともできない。ふがない私が、丸裸の私が行きついたところ。それは「社労士として生きる」という強烈な思いであった。生きたい、生きて仕事がしたい。訳もなく慟哭を続けた私。やがてふつつと体内から湧き上がってきたマグマの様な思いが体内に充満した。やってやる。何より私の為に、そして妻や家族の為に。

払うだけ払った後の破産だけにダメージは大きく現実の生活はまだ苦境が続いていた。しかし私の生来の明るい性格や妻の献身的な尽力があって、その後は特に危機的な状況に陥ることはなかった。私のアルバイトも続いていたし、妻も次々と内職的なものを見つけてきては家計を支えた。スーパーでパート勤務をしたり、家の玄関先でたい焼きを売ってみたり。借金の責任を一身に負い、どんな苦しい時でもグチひとつこぼさず、食事の世話にも抜かりがなかった。妻のそんな芯の強さに、私以上の人間性、人格を感じるが多かった。

そんな時、清光社の田井社長から北条にある税務署の朝の清掃の仕事の話があった。遠方であることもあり私自身はためらっていたが、妻は是非やりたいという。早朝、家を出て自転車で20～30分以上かけて税務署へ行き、朝のゴミ出し、床にバキュームをかけ机を拭くという仕事であった。朝2～3時間程で収入はそう

多くなかったが、彼女はそれを1年近く続けた。ある年の2月、厳冬の中、姫路でも珍しく雪が降り積もった。危険だから先方に断りを入れるからという私の言葉に耳も貸さず、雪が舞い散る中、妻は自転車で出発した。3階の窓から見送る私。まだまっくらな夜明け前の雪道に、小さな自転車の轍を残して、彼女は暗闇の中に消えていった。私は思わず、その後ろ姿に両手を合わせ、近い将来の復活を心に誓った。この妻の為にも立派な社労士になって、アルバイトをしなくてもよい平穏な暮らしをさせてやると…。この朝の光景が私の仕事の原点となった。どんな難解な問題に遭遇しても決してひるむことはなかった。彼女の責任感とあの困難な状況の中で休むことなく勤務しようとしたあの姿が、その度に勇気を奮い起こさせてくれた。

本業とアルバイトの毎日。心掛けた事は与えられた仕事は手を抜かずやりきること。そして明るく挨拶し元気よく顧客と接すること。精神的に萎えそうになった時も元気を見せることで気持ちを奮い立たせた。仕事を終えて事務所に戻った時に感じたのは仕事とそうでない時のギャップの大きさ。仕事をしているときはいいが、仕事をしていないときはどうしてもネガティブなことばかりが頭に浮かぶ。眠りも浅く時々はうなされて目が覚めることも。世の中はそう簡単に一度奈落到ちた者を優しく迎え入れてはくれない。頑張っても頑張っても水面上に顔を出すことができない、そんな日々が通りすぎていく。クラブの役職には積極的に就いた。支部活動にも本会活動にも顔を出し、あえて積極的な行動を心掛けた。明と暗、死への恐怖と将来の不安、打ち寄せる波のようにそれは寄せては引いていった。何度も何度も。平成10年11月19日、妻への破産者宣告があった。次に待っていたのは少し猶予期間はあったが家の強制競売。ぬかるみの中で、しかし立ち往生するわけでもなく悔しさと屈辱感を噛みしめながらも、とにかく生きていた。



生きていればやがて道が開かれることを信じて。